る文献の引用の仕方は大いに参考になる．

「付則I　雑種の学名」は12の条項が挙げられている．本誌に投稿いただくときの参考になると思われるので，二つの勧告をご紹介する（勧告なので必ずしも従う必要はない）．「勧告 H.3A.1. 雑種分類群の学名では，乗法記号×はその学名または形容語の最初の文字の直前［×と最初の文字の間にスペースを空けないの意，評者注］に置くべきである．しかしながら，もし乗法記号が使えず，その代わりに文字“x”を使うならば，“x”と形容語との間に1字分の空間を残すことであいまいさを避ける助けとして良い．文字“x”は小文字とすべきである」「勧告 H.10B.1. すでに命名されている種内分類群の間に生じた雑種に対する新学名の発表を意図したときに，著者は，雑種式が新学名に比べて，より煩雑であるがより情報量が多いことを考慮し，新学名が本当に必要かどうかを注意深く検討すべきである」．このことは種間雑種にも当てはまることである．

巻末に事項索引が掲載されている．これがたいへん役に立つ．項目は五十音順に並べられ，それぞれに英語の用語が対比されている．そのため，日本語と英語の対照表のような役割も果たしている．この事項索引は，原書の Subject index を翻訳したものではなく，日本語版のために邦訳委員会が独自に作成したものだという．植物分類学の歴史はここ日本においても決して短くない．そのために，同一の術語についても多くの研究者によって，さまざまな訳語がつけられてきたものもある．本書の事項索引を，植物分類学用語の上での，日本語から英語への言い換え，あるいはその逆の，現時点でのスタンダードとして利用していきたい．本書ではこの事項索引の次に，邦訳委員会：植物命名法用語集が続く．これを事項索引と併用することによって，日本語→英語→ラテン語の対応関係も明確に見えてくる．この事項索引と用語集は「付録」以上のものといって良いだろう．

原書の表題に「第16回国際植物会議，（米国）ミズーリ州セントルイス，1999年7–8月で採択された」という副題が付けられている．このためこの規約はセントルイス規約 St Louis Code と略称される．本書は黒い背表紙に銀色の文字という装丁となっている．この装丁は原書と同じである（背表紙の材質は異なっている）．黒い背表紙と銀色の文字に何らかの意味をもたせたらしいことを，Code の編集委員長である W. Greuter と幹事の D. H. Hawkworth が述べているが，東京規約が「紫の規約 purple Code」と呼ばれたように，何度手にとっても汚れの目立たない，「黒の規約 black Code」として利用されることを期待したい．（門田裕一）

□大塚孝一：**信州のシダ**　194 pp．2004．¥2,415．ほおづき書籍．ISBN：4434048090.

長野県の自生種292種類の生態写真を A5 版の頁に2種類ずつ納め，解説をつけたものである．配列は人里，山地や渓谷，高原や湿地，高山や亜高山，暖地と分けてまとめてあり，長野県産シダ植物目録，県 RDB 掲載種，主な属における種の検索表を伴う．野外観察の参考に手頃な本である．

一方，近頃は優れた写真図鑑があふれているので，地域の人達はもっと独自性のある図鑑を目指せないだろうか．たとえば，検索表に出てくるあらゆる形質，羽片，ソーラス，包膜，鱗片，毛，胞子などを，すべての種について示すということは，全国規模の図鑑ではなかなかできない．地域研究者ならば，種類数が少ないことと，現場に精通していることとで有利だと思う．さらに本書では1頁でしか示されていない芽立ちの形状や季節的変化の記録は，地元の人達なら網羅的に観察記録できるので，それらがまとめて示されれば，有用性が高まるものと思う．ほおづき書籍の連絡先は FAX 026–244–0210．著者へ直接申し込んでもよく，連絡先は TEL/FAX 026–227–9903である．（金井弘夫）

□清水敏一：**大雪山の父・小泉秀雄**　438 pp. 2004．¥4,725．A5版．北海道出版企画センター．ISBN：4832804154.

植物分類学の研究者として，全貌があまり知られていなかった小泉秀雄氏の人物像を，多くの資料を発掘しながら明らかにしたもので，同じ著者の「大雪山わが山小泉秀雄」「小泉秀雄植物図集」に続く決定版である．前半は小泉の生涯を物語ると共に，大雪山の

開発や研究に果たした小泉の大きな業績が詳細に語られる．後半は南アルプス，北アルプス，千島などにおける小泉の調査行である．後半部は主として小泉の野帳に基づいて横内齋氏が謄写印刷した記録から抽出したもので，この地域の小泉の活動が活字になったのは初めてのことだという．自ら恃むところの多かった小泉の，論敵に対する強烈な表現が各所に見られる一方，彼を指導者と仰ぐ人達も少なくなかったことも知られる．成果と記録という終章があり，国立科学博物館に引き取られ，標本化が進行中の小泉標本の現状や小泉の遺族について記述されている．小泉は三度結婚し，それぞれ子をもうけているが，消息が分らなくなった人たちが，前著の出版を機に判明し，その家族を大雪山小泉岳に案内する記事で結ばれている．著者は登山史家で，とくに大雪山に関心が深いので，登山，探検，地図，日程などに主題が置かれ，小泉の野帳の多くを占める植物名の羅列は省略されているが，独学で孤高の境地を築いた小泉秀雄氏を知る，絶好の著書である．なお，小泉ミサオ夫人は2004年６月17日，102歳で亡くなられたという．

年譜，著作論文一覧（160篇），人名索引がある．人名については本文の各所に略歴や業績を交えた注記があり，自然史関係ばかりではなく，実業家や文人墨客を含む多くの人物が紹介されていて，これはこれで興味深い．同じ著者による，「知られざる大雪山の画家・村田丹下」（北海道企画センター　2003年）があり，ここにも小泉の名が各所に見られるので，併せて参考になる．なお，著者へ直接申し込めば，送料はサービスするとのことである．連絡先：〒068–0835 岩見沢市緑が丘5–166 清水敏一氏． （金井弘夫）